

本日、こうして皆さんに博士、修士、学士のそれぞれの学位記を授与できることを嬉しく思います。学位記とは、専門的な知識、技術、態度を修得したことを、日本福祉大学として証するというものです。それは所定の科目を履修したというだけではなく、各学部のディプロマ・ポリシーに照らして、しっかりと専門性を身に付けたということを本学が証明するものです。本日、みなさんが手にする学位記には、これまでの大学生活の全てが刻まれているのです。そのことを、どうか誇りに思ってください。

多くのみなさんが入学した 2021 年春。コロナがいつ収束するかわからず、どんな大学生活になるか、不安な気持ちでスタートしたことでしょう。当時はオンラインの授業が多く、友だちと対面で会う機会も制限され、私たちは、そして社会はこれからどうなっていくのか暗澹たる気持ちでした。

とりわけ「ふくし」が大事にしてきた人とのつながり、人と人との関係性を断ち切り、できるだけ接触を控えるように言われたのは、つらいことでした。「ふつうのくらしのしあわせ」が一変したのです。でもそのなかであって、私たちはどう人となることができるか、いろいろな工夫を重ねました。私たちはあらためて「つながり」の大切さを身をもって体験しました。

この「つながり」は、現代社会にとって大きな課題です。そしてこれからの未来にとって大きな希望でもあります。すでに皆さんは学んできたように、日本において孤独・孤立が深刻な社会課題になっています。決して一人であることが悪いことではありません。私たちは一人で生活を楽しむ自由も獲得してきたのです。ただ何かあったときに相談できる人がいない、あるいは寂しさを強く感じ続けることで日常生活に支障を及ぼしてしまう。そんな人たちが増えてきているのです。

人と関わることは、ときに煩わしいこともあります。ケンカになったり、気まずい関係になったり、ときに傷つけられることもあるかもしれません。でも誰かがそばにいてくれるという安心感を私たちは知っています。私たちは、身の回りで気になる人がいたら、そっと寄り添うことの大事さも学んできました。そして何よりも自分自身を含めて、いのちを大切することを知っています。

世界では自国第一主義や分断と格差が拡大しています。これまで大切にしてきた多様性や包摂性を揺るがしかねない事態が進行しています。戦争にも終わりが見えません。

能登半島地震からも 1 年 3 か月が経ちましたが、日本では自然災害はこれからも続きます。人口減少や単身世帯の増加など社会構造は変化していきます。

ふくしは当たり前にあるものではなく、私たちが知恵を出し合い、創り出していかなくてはいけないもののなのです。「ふつうのくらしのしあわせ」について学び、**Well-being for All**、全ての人が幸せになれる日常をめざして、みなさんは社会に旅立ちます。だからこそ、現代社会にとって皆さんは大きな希望なのです。

日本福祉大学を建学された鈴木修学先生は、大学の根本精神として、次のように語っています。「この悩める時代の苦難に身をもって当たり、大慈悲心・大友愛心を身に負うて、社会の革新と進歩のために挺身する志の人を、この大学を中心として輩出させたいのであります」と。

どうすれば誰もがしあわせに生きていくことができるのか。それには正解があるわけではありません。マニュアルがあるわけでもありません。正解のない問いを、自分で探していくのです。どんな答えを見つけていくのか、みなさんの人生のなかで問い続けてください。それが日本福祉大学で学んだ「志し」だと思います。そして大学としてもこの難問に向き合い続けていきます。何かあったときは、いつでも大学に戻ってきてください。

これを卒業にあたって、はなむけの言葉といたします。

最後になりますが、本日のこの日を無事に迎えられたこと、ご家族、保護者の皆様、そして来賓の皆様はじめ関係者の皆様方に、大学を代表して心から感謝申し上げます。

あらためまして、ご卒業、おめでとうございます。